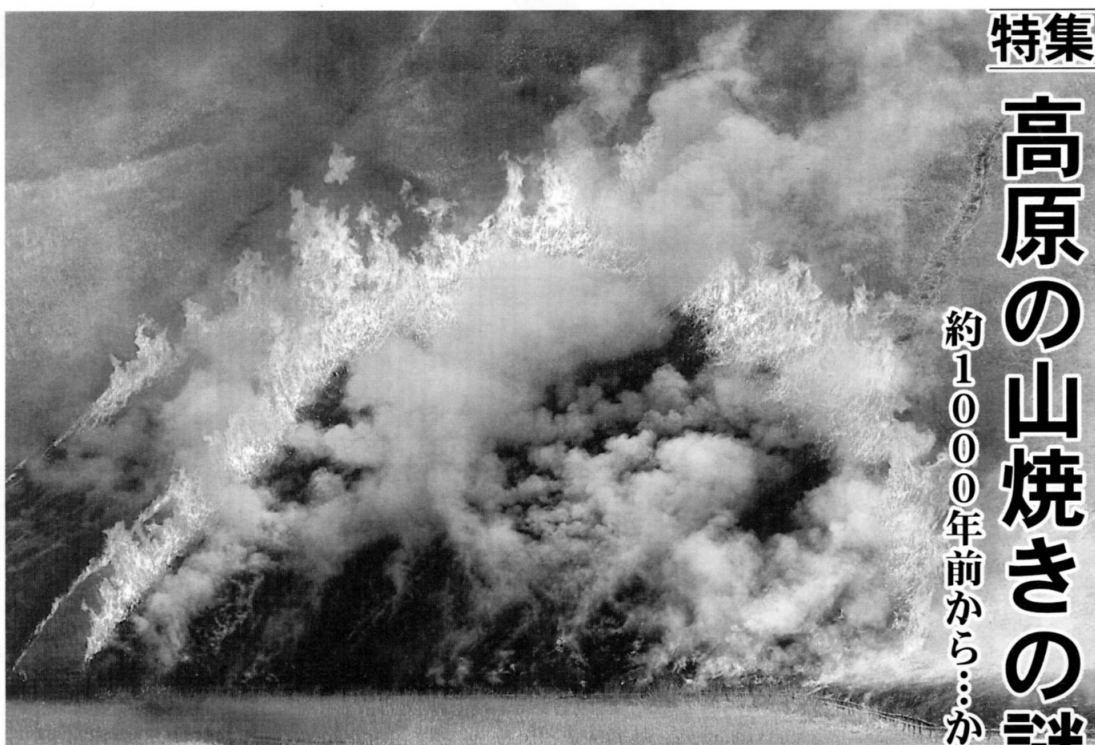


# 高原の山焼きの謎に迫る！

## 約1000年前から…か!? 曾爾高原の山焼き



採取し、微粒炭分析、花粉分析、年代測定を行いました。

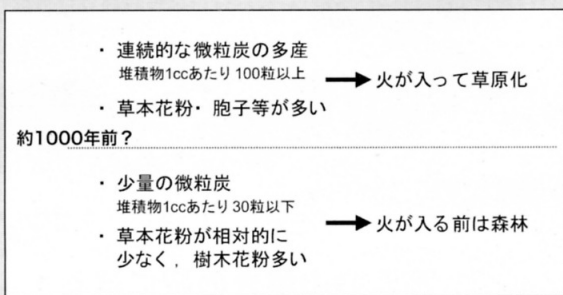
これらの分析・測定の結果は、「曾爾高原の山焼き」の起源に一石を投ずる興味深いものでした。今回は大阪市立大学の井上淳さんにお願ひし、研究の概要と結果、またそこから推測される事柄を発表していただきました。

微粒炭とは、山焼きや森林火災等の植物燃焼によって生じるマイクロサイズの小さな炭のことです。ポーリングコアを用いて採取した2mの泥炭堆積物について詳しく分析した所、堆積物表層から深度1mの堆積物では多くの微粒炭が連続的に検出されました。

また、同深度の堆積物にはイネ科(ススキやアシなど)などの草本花粉や胞子

が多く含まれていました。微粒炭が多く含まれる下限深度1mに含まれる微粒炭の放射性炭素年代測定を行った所、約1000年前(西暦890年-11030年)の年代値が得られました。

一方、深度1mより下位の微粒炭が少ない堆積物にはイネ科花粉、胞子が少なく、主にモミ属、ブナ属、コナラ属などの樹木花粉が含まれていました。



以上の結果から、元々は森林であった高原に約1000年前頃から火が入

り、それによって草原化した可能性が考えられます。

ただし、

- ・ 今回得られた年代測定の結果に基づくと、堆積速度の変化が非常に大きい。
- ・ イネ科花粉の増加が、ススキによるものかどうかがよくわからない。
- ・ 深度2m付近でも部分的に微粒炭の増加がみられる。

などの未解明点・問題点があります。

今後、研究グループではさらに年代測定の分析点数を増やし、植物珪酸体分析など様々な分析を行うことにより、これらの点を明らかにしていきたいと考えています。

(大阪市立大学 井上 淳)

井上 淳

村では、井上さんから研究グループと連絡を取り合い、随時、新しい分析結果などを村民の皆さまに報告していく予定です。

大阪市立大学研究生の井上淳さん、京都府立大学の高原光教授、同大学院生の西村亮さんから研究グループ

は、曾爾高原の山焼きの歴史と過去約1万年間の植生変遷を明らかにする目的で、お亀池湿原の底質堆積物を